

2015(平成 27)年度用



## 国際交流事業助成報告書

平成 28 年 1 月 21 日

公益財団法人 小西国際交流財団 御中

### 【事業報告者】

申請団体/ 代表者名	大橋 弘嗣	 ※個人申請の場合は申請者名を記入
住 所	〒530-0012 大阪市北区芝田 2 丁目 10-39	TEL
		FAX
担当者名		
自宅住所		TEL
mail アドレス		

### 【事業の概要】

1. 事業名称又は課題

日仏整形外科交換研修プログラムの継続

日仏整形外科合同会議の開催

2. 共催及び後援等支援団体名

日仏整形外科学会

3. 助成金額と申請時の助成金の使途 (実際の使途は、6. 会計報告に記入して下さい)

(※ 他の機関からの助成がある場合は、この事業に要する総費用 400,000円)
<当初の助成金の使途> ※ 当初の予定と差異が発生している場合は、理由を記入して下さい
交換研修医の渡航費用と滞在費の一部を援助

#### 4. 事業の実施概要

2015年度の交換研修プログラムには4名の応募がありました。役員会のメンバーで面接を行いましたところ、いずれの先生も既にフランスの先生とコンタクトを取っているなど交換研修に積極的であり、かつ優秀であったために4名とも合格としました。

4名とも既にフランスへ交換研修に行かれており、うち、2名の先生から帰朝報告をいただいておりますので、別紙に添付いたします。

#### 5. 実施した事業の成果及び改善点

交換研修においてフランス整形外科のアイデア、技術、臨床成績などの習得は十分にかつ有効に行われております。さらに医学の分野だけではなく、フランス人と友好関係を築いたり文化的交流を行ったりと幅広い成果が得られていると考えております。

かつては資金的余裕がなかったために交換研修の補助を十分にできなかった時期もありましたので、これからもできるだけ資金を集めて多くの先生方に安心して日仏の交流ができるよう日仏整形外科学会としてサポートしていきたいと考えておりますので、今後ともご協力の程、よろしく願いいたします。

帰朝報告

千早病院整形外科 菊池克彦

私は H27.9 月より 3 か月間 Paris と Lyon で研修する機会を頂きました報告させていただきます。

### Clinique Jouvenet, Institut de la main (Paris)

最初の 6 週間、パリ 16 区にある Clinique Juvenet, Institut de la main で研修しました。Institut de la main は有名な Prof. Tubiana が設立した private clinique です。Prof. Tubiana は亡くなりましたが、13 名の上肢専門の医師により年間約 7000 例の手術が行われています。ここは、フランスだけでなく各国からの resident や visitor を受け入れており、私がいた時もスペイン、ルーマニア、イタリア、アルジェリア、香港からの resident、visitor がいました。手術は日本と違って手洗い看護師がおらず、器械出しを resident が行っていました。また、手術室内のリカバリールームで患者は麻酔がかかっている状態で待機しています。術者はひたすら手術室を行ったり来たりして手術をこなします。私は主に手関節鏡で有名な Prof. Mathoulin についていましたが、午前中あるいは午後だけで 10 件近くの手術が予定されておりました。Prof. Mathoulin の手関節鏡は見事で SL 靭帯修復 + TFCC 縫合は 20 分くらいで済んでしまいます。その他の疾患も可能な限り鏡視下でされており、wafer や radial styloidectomy、4-corner fusion、舟状骨偽関節手術など教科書でしかみたことがないような鏡視下手術を直接見ることができました。Prof. Mathoulin はとても明るく、手術中も周りを笑わせたり得意の歌で患者 (awake です) や私達を魅了していました。私を見ると直ぐに手洗いをして来いと言ってくれ直接手術に入ることができとても勉強になりました。また、手外科手術でも Prof. Mathoulin はルーペを用いず細い老眼鏡だけで大抵の手術をされていたのがとても印象的でした。

Prof. Mathoulin の手術がないときは Mme. Leclercq の手術を見ていました。Mme. Leclercq はとても厳しい先生で、あの緊張が張り詰めた手術室の雰囲気は忘れられません。ある resident は Mme. Leclercq の手術が終わった夜はちょっとした party のようにお酒を飲むんだと言っておりました。手術は手外科一般から spastic hand の手術等、様々な手術をみせて頂きました。Mme. Leclercq の手術はとても丁寧でした。CM 関節形成術はどの先生も行っていますが、大菱形骨摘出の時は、乱暴にみえることが多々ありました。しかし、Mme. Leclercq の大菱形骨摘出は強引なところは全くなくいつも涼しい顔で大菱形骨を一塊として摘出していました。そのコツを教えて頂きましたが、未だに私は汗びっしりになりながらやっています。Mme. Leclercq は私達 visitor をとても歓迎して下さり、またとても大切にしてくれ、症例毎に丁寧に解説して下さいました。また、「私の名前はキ

ヤロリンです」 と上手な日本語を披露してくれた事も忘れられません

Institut de la main ではそれぞれの医師が自分の好きなやり方で手術を行っていました。CM 関節症に対しても色々な方法で **suspension** を行ったり、人工関節を行ったりしていました。あるスタッフに、これだけ症例があるので、どのやり方が一番良いか比べたりしていないか聞いたところ、比べたデータはないが、自分のやり方の長期成績は問題ないからこのやり方でやっていると言われました。フランスの外科医はこだわりを持って手術をすると聞いたことがありますが、まさにその通りでした。



図 1. Prof. Mathoulin (中央) の手術風景。本当に小さな老眼鏡で手術をしています。また、各国からの visitor にいつも囲まれています。



図 2. Mme. Leclercq の手術風景。

## Hopital Edouard Herriot (Lyon)

10月半ばから Lyon の Hopital Edouard Herriot で2週間研修しました。Hopital Edouard Herriot はリヨン大学に併設する大学病院で、SOFJO の元会長である小林晶先生が勤務されていた病院です。歴史は古く第二次世界大戦時にも活躍していた病院で、広い敷地に A から T までの pavillion が建っており、地下の通路で全て繋がっています。その通路は広い敷地に張り巡らされているので長いのはもちろん、廊下の幅もかなり広く作られていました。大戦時にトラックが通れるように作られたと聞きました。今はさすがにトラックは通っておりませんが、大きな牽引車が患者の寝ているベッドを引きながら pavillion 間を移動していました。整形外科は pavillion T にあり、上肢と下肢チームに分かれていました。私は上肢チームの Prof. Herzberg のもとで研修しました。Prof. のもと 5 人のスタッフがおり、スタッフは 1 週間交代で外傷センター・救急外来を担当していました。毎朝 7:30 から救急外来・病棟・手術患者のカンファレンスがあり、8時から手術でした。救急外来担当のスタッフはカンファレンス時に明らかに疲れているのが分かり、救急外来の激務を表していました。救急外来の患者は pavillion G で初期治療が行われ、更に加療が必要な場合は pavillion T で定例手術に組み込まれます。大学病院の外傷センターからの症例ということもあり、高エネルギー外傷が多く、上肢では肘関節・手関節脱臼症例や両側罹患症例が多くみられました。一日の手術件数は 5 例くらいでちゃんと直介ナースがいました。外傷以外の疾患では、Dupuytren 拘縮の再手術や腕神経叢損傷の手術など手のかかる手術もみられました。Prof. Herzberg は人工手関節も研究されています。カンファレンスで高齢者の橈尺骨遠位端関節内骨折の症例が discussion されどうするか聞かれました。骨折は関節面近くで、粉碎が強くロッキングプレートだけで固定するのは難しいと思い、ロッキングプレートに創外固定を併用すると答えたところ、Prof. Herzberg はそれも良い方法だが、自分の所ではこのような症例に対しては人工手関節を行い、早期可動域訓練が可能な状態に持っていくと教えてくれました。幸運にも滞在中に、人工手関節の手術を見ることができました。日本では見たことがなかったのでとても勉強になりました。Prof. Herzberg は多忙を極めており、当然私との時間も限られておりましたが、assist Prof. の Dr. Izem が私をよく構ってくれました。カンファレンス後に毎朝美味しいコーヒーを飲みながら珍しい症例を discussion することが日課で、その他、手術の合間や手術後にも食事に連れて行ってくれたりと本当に良くしてくれました。他の先生が帰朝報告で書かれているように、みんな昼から当然の様にビールやワインを飲むのには驚きました。また、大学病院は private clinique に比べると忙しいのではと聞いたところ、「確かに private clinique に比べると仕事は多くバカンスも給料も少ない(でもちゃんと 3~4 週間はとれると言っていました!)。でもここでは難しいけど面白い手術ができる。だからここに残っているんだ。」と目を輝かせながら教えてくれました。何とも頭の下がる思いでした。また、たまたま上肢チームのシニアレジデントの Thesis があり、Prof. Herzberg からは是非見に行くように言われました。

レジデントが研修中に自分でまとめた研究テーマを発表し、審査後合格すれば念願の **docteur** になれます。その **Thesis** の会場には自分の同僚だけでなく、両親・親族まで来ておりました。本人はとても緊張しているようにみえましたが、**docteur** になる最高の瞬間を最愛の家族と味わえるなんて羨ましいなあと思いました。貴重な瞬間に立ち会わせて頂いた **Prof. Herzberg** には感謝の気持ちで一杯です。



図 3. **Thesis** で。写真右のレジデントが宣誓を行うところです。審査する教授陣の前で、カメラを構えている親族の方々が見えます。

### **Clinique Charcot (Lyon)**

その後、同じく Lyon の **Clinique Charcot** の **Dr. Lille** を訪ねました。**Clinique Charcot** は **private clinique** で **Dr. Latarjet** が設立した病院です。肩関節前方不安定症に対する **Latarjet** 法の **Dr. Latarjet** です。しかし、今は **Clinique Charcot** では肩の手術をする先生はいないとのことでした。**Dr. Lille** は肩以外の上肢外科をされており、他医で行われて経過が良くない難しい小児の上腕骨滑車冠状骨折再手術をととても見事にされていました。また、**CM** 関節症に対しての **カップ&ソケット** 型人工関節は得意のようで、何度も勧められました。**Clinique Charcot** では **vsitor** が珍しい様で、**co-medical** を含め皆さんにととても歓迎されました。**Dr. Lille** には旧市街にある、**Meilleur Ouvrier de France** に選ばれた事のあるシェフがいる **bouchon** にも連れて行ってもらい、名物料理とワインをご馳走になりました。本当に美味しかったです。また、**Dr. Lille** がお土産にくれたその店のエプロンは私の宝物となっています。2年後に日本に来ると言ってくれましたのでその日をととても楽しみしています